

本山修験略要の注釈的研究

中村 眞人

第一章 解題——「本山修験略要」と本山派修験道

「本山修験略要」は、本山派修験道の組織と教理の梗概を示し、その修行と学びについて具体的な指針を与えるものであり、漢文で記述されている。『日本大藏經』（鈴木学術財団、一九七七年）のなかに「修験道章疏」があり、本書はその第三巻に収められている。「修験道章疏」では、「疑・道晃親王撰」となっている。本文末には、園城寺法明院の敬長が、この文書は聖護院の書庫にかねてより存在していて、撰者は不明、推定するに道晃親王によるものであらう、と来歴を記している。道晃親王は、江戸時代前期の聖護院門跡である。

敬長は江戸時代後期の僧侶であり、生没年は文書によって違いがある。園城寺のなかにある法明院の住持をつとめた。日本天台宗の僧侶として天台学や密教を研鑽し、また儒学を始めたとした漢学にも深い素養があった。日本天台宗の僧侶が学び修めるべき事柄を説いた「山家正統学則」ほか、多数の著述が残っている。

現在も聖護院から発行され本山修験宗で用いられている『本山修験勤行要集』には、「聖護王府蔵板」の奥付があり、そこに敬長の識語がある。

「今茲（こんじ）、天保甲午秋、聖護王、予に命じて修驗常課の式を選輯せしむ。仍って古規を校（かんが）へ恭しく法要を録す。後賢、冀（こひねがは）くば訂正せよ。大阿闍梨比丘敬長、謹みて誌す。」（原漢文）

修驗道とは、日本の仏教における実践様式の一つである。山岳を始めとした大自然のなかに身を置いて、世俗を超越した内面的な体験を得ることを重視してきた。これを実践する人々の集団が、中世から天台宗や真言宗の大寺院を拠点として組織化され、制度を持つに至った。それらのうち、当時の天台宗の系統に属する聖護院を拠点とする集団が、本山派を名乗った。

「本山修驗略要」の冒頭には、「本山修驗宗とは高祖役公の正統なり」とある。現代の日本で活動する宗教組織である本山修驗宗は、この流れを汲むものである。本山派修驗道の宗門組織は、江戸時代、修驗宗を名乗っていた。ところが、一八六八年の神仏分離令、権現号・門跡号の廃止令、一八七二年の修驗宗廃止令によって解体され、聖護院末に留まった寺院と僧侶は天台宗寺門派へと所属させられた。

二〇〇七年より聖護院門主となった宮城泰年がかつて著した「本山派修驗道の修行」（『修驗道修行大系』国書刊行会、一九九四年）には、一九四六年に「天台宗から分かれ修驗宗を創設」、一九六一年に「名称を変更して本山修驗宗」となった、とある。この間には、聖護院と有力な末寺との対立などがあり、そうした組織的変動については、宮家準『修驗道組織の研究』（春秋社、一九九九年）に詳しい。

今日における信仰者の集団としての本山修驗宗については、宮城泰年による信仰的な著書『動じない心』（講談社、二〇一二年）にうかがうことができる。ここに描かれた人々は、素朴であることを尊んで虚飾がなく、態度は率直であり、また困難に対して冷静である。この著書については、宮家準による書評が学会誌『山岳修驗』（第五三号、二

○一四年）に掲載されている。宮城は、宗教者として学術団体である山岳修験学会を重視し、発足当初から熱心に参画している。宮家は、宮城の人柄をよく知り、宗教学者の視点から共感的に理解を示している。今日の本山修験宗は、修験道の秘儀である深仙灌頂を二〇一九年にも大峰の奥深いところで開壇している。「本山修験略要」に「深山灌頂」とあるのが、これである。

現在の本山修験宗は、宗門の諸規則において、「本山修験略要」に言及していない。また正規の原文 (text) を確定していない。ここでは、天保五（一八三四）年の聖護院蔵版を底本とした『日本大蔵経』所収のものを一応の原文としている。

以下、訓読として、原漢文を日本語の文語に置き換えた。次に、解釈として、その意味を現代文で示した。注記には、内容の理解に必要な事柄を記した。今、理解の便のために、仮に節を分かち、項目を掲げた。

本文の原文については、今後、校訂が進められなければならない。以下の訓読と解釈は、試論的な私案であり、今後の学究の契機とすべく公表する。

第二章 本山修験略要の本文訓読と解釈

第一節 本山修験宗

(一) 本山修験宗と大峰葛城

訓読

一 本山修験宗とは高祖役公の正統なり。すなはち龍樹大士かつて阿字の法をもつて特に高祖に伝ふ。いまし高祖この法を広め終に両峰の曼荼を開く。これ胎金を熊野金峰に表はし法華を葛城に布くゆえんなり。靈鷲の勝場あに遠からんや。法界の秘宮すなはちこれなり。

解釈

一 本山修験宗とは役行者の正統である。これを説明すれば、龍樹菩薩がかつて密教を特別に役行者に伝え、それ以来、役行者がこの法を広めて、ついに大峰と葛城を曼荼羅の理想世界とした。それゆえに、熊野から金峰山までを胎藏界と金剛界という密教世界の表現とし、葛城を法華経の世界と見なしている。釈迦が法華経の教えを説いた靈鷲山という素晴らしい場所は、遠い彼方にあるのではない。また、曼荼羅という真理の密教世界は大峰に他ならない。

注記

高祖役公とは役行者とも呼ばれる役小角のことである。国家が正史とする『続日本紀』（西暦七九七年完成）の文武天皇三（西暦六九九年）五月丁丑の記事に「役君小角伊豆島に流さる。初め小角葛城山に住し呪術を以て称さる。外の従五位下韓国連廣足、これを師と為す。のち、その能をねたみ、讒するに妖惑を以てす。故に遠島に配せらる。世、あひ伝へ言く、小角よく鬼神を役使し、水を汲み薪を採らせ、もし命を用ひざれば即ち呪を以てこれを縛す。（原漢文）」

とある。この記述のほかに歴史文書上の記録はない。九世紀頃の説話集『日本国現法善惡靈異記』（通称『日本靈異記』）などでは役優婆塞とも呼ばれている。

龍樹大士は龍樹菩薩とも呼ばれる。龍樹とは、インド名、ナーガールジュナ Nāgārjuna の漢訳名であり、いくつかの伝記では大乘仏教の大成者とされて、大乘仏教各派で尊崇される。

（二）本山修験宗の伝統と、顕密修験という三つの法

訓読

顕密の二教すでにここに基を肇む。しかるのちこの法を奉るは流伝綿延として世にその人乏しからず。なかんづく智証大師かつて山に棲み道を修めこの法を興隆せしむ。故をもつて吾が聖護王府の主、宗脈を続けるに似てここに千有余年なり。春秋入峰の式を伝襲し、もつてこれに一派を頒ち如法に勤修せしむるなり。これによりて搶攘の間もなほ修験の法を失はず。実に吾が王府主、連代この宗を管轄するの力なり。ここをもつて我が三井衆徒もとより大師の

遺教に因りて正しく修驗の法を伝ふ。棲山の跡を追ひ兩峰を抖擻する者、往々、すくなからず。皆、記伝に載りてあり。またその古記に曰く、わが山開闢以來、役氏正統を確かに守りて墜つることなし。この故に顕密修驗の法、鼎の足の相補して立つるが如し、と。まさに知るべし、この宗を奉ずる者、出家、優婆塞を撰ばず、よろしく顕密修驗の法に参學し以つて勉勵精進すべきなり。

解 釈

顕教は法華經の表現である葛城を、密教は胎藏界・金剛界の曼荼羅である大峰を、その基本としている。その後、多くの人々によつて脈々と伝え広められてきた。なかでも智証大師は、かつて山に住んで仏道を修行し、修驗道を興隆させた。それゆえに、わが聖護院の主は、千年以上もの間、その伝統を守り続けてきた。春と秋の大峰入峰の儀式を伝えて実行し、一つの宗派として伝統に定められた通りの実施を勤めさせた。そのため戦乱の間も修驗の法は失われなかった。実に、わが聖護院の主は、代々、本山修驗宗を管轄する力を發揮してきた。だからこそ、三井寺の衆徒は智証大師の遺した教えに従つて修驗道を伝えている。山に住んで修行し、大峰葛城を抖擻する者は、昔から少なくともなかった。皆、記録や伝記に載っている。また古い記録には、「わが山が開かれて以來、役行者の正統を確かに守つて決しておろそかにはしなかった。それゆえに、顕教、密教、修驗道という三つの法は、鼎の三本の足が支えあつて立っているのと同じである。」と書かれている。次のことを銘記すべきである。本山修驗宗を奉ずる者は、出家修行者であろうと在家修行者であろうと、顕教と密教と修驗道の法を学び、熱心に勤め励まなければならない。

注記

聖護王府とは、聖護院という寺院を指す。現在は京都市左京区にあり、聖護院門跡とも言う。皇族もしくはその周辺の人物が住んだためにこのように呼ばれる。聖護院を開いた増誓は、三井寺の長吏として衆徒を指導する立場にあった。

優婆塞とは、在家の仏教修行者である。本書によれば、たとえ在家の修行者であろうと、本山修験宗に帰属する以上は、顕教、密教、修験道を熱心に学ぶことが求められている。

(三) 修験者の種類と深山灌頂

訓読

但し、出家修験者は剃染受戒して漸くに慧業を進め、乃し諸尊瑜伽等を修め、終に伝法職に充つるを得。また数次入峰抖擻しその勤めを積み累ね、しかしてのち深山灌頂を伝へらるる者は、この出家修験の階次なり。優婆塞修験者、初めに剃染の式を受け、機に随ひて瑜伽を修習し、更に入峰累習の続くるをもつて、終に深山灌頂を受くるを許さる、また猶し出家修験のごとし。惟るにこれ彼に較べて少しく輕略なるのみ。その俱に天下寧清を禱りてますます国家の昌運を護るに至りては、その揆ひとつなり。それ深山灌頂とは、金峰の秘訣にして、一宗の榮ゆるところなり。然ればその人に非ざれば敢へて妄りに伝へず。故に入峰練行の功を積みて終にこの法流に浴することを得。その余、採燈護摩等、また祖承の密法なり。他家の高僧、また欽慕してやまず。いはんやこの宗を奉ずる者、篤志研覈せざるべきや。

解説

このように出家修験者と在家修験者はともに顕密修験の三つを学ばねばならない。しかし、その間に違いもある。出家修験者は、僧侶の姿になり、戒を受けて、智慧を磨く修行をだんだんと進め、それから諸尊法など密教の瞑想法を修行し、ついには伝法を行う地位に任命されることもある。また、入峰抖擻して修行を積み重ね、そのちに深山灌頂の儀式にあずかる者も、この出家修験者の階層に属する。在家の優婆塞修験者であって、はじめに髪を剃り法衣を身に着ける儀式を受け、機会を得るにしたがって密教の瞑想法を学び習熟し、その上、入峰修行を積み重ねたことによって、ついに深山灌頂を受けることを許された者は、出家修験者と同様である。思うに、こうした優婆塞修験者は、出家修験者と較べて少し簡便で略式であるだけである。出家修験者も在家修験者も、ともに世界の平和と正義を祈り、社会がますます発展するように護っていくのであるから、その行動は一体である。

深山灌頂とは、金峰山の最も重要な秘密の法であって、これによって本山修験宗という一つの宗門が栄えている。したがって、それにふさわしい人物と判断されなければ滅多に授けられない。それゆえに、入峰修行の実績を積んだ上でなければ深山灌頂の伝統を受け継ぐ者にはなれない。そのほかに、採燈護摩など、役行者から代々受け継がれてきた秘法がある。他の宗門の高僧も、これらを尊重し敬慕してやむことがない。ましてや、本山修験宗を奉じている者は、熱心に詳しく学んで究めようとしなければならない。

注記

剃染とは、剃髪染衣の略であり、髪を剃り法衣を身に着けることを言う。

胎藏界曼荼羅や金剛界曼荼羅という、一つの曼荼羅の全体を対象とした礼拝と瞑想の体系を、大法と呼ぶのに対し

て、曼荼羅を構成する一つの尊格を対象とするのが一尊法である。密教には、法流と呼ばれる流儀ごとに、多数の一尊法が伝承されている。これらを諸尊法と言う。密教修行者は、伝授された大法を修するだけでなく、諸尊法のいずれかを繰り返し修行し、習熟することによって、宗教的な威厳と見識を身につけていくことができる。

伝法とは、ここでは、密教の作法に則って秘法を伝授する行事を言う。密教の秘法伝授は、阿闍梨が、人柄と資質を見て適切と判断した受け手に対して、対面で行うことを原則としている。なお、阿闍梨とは、サンスクリットで「規則を知る者」を意味する *acarya* の音写である。顕密修験の三つと言った場合、密教と修験道とは区別されている。しかし修験道作法の多くは密教の作法に則って伝授される。

採燈護摩とは、通例、屋外で修される護摩供養であり、修験装束を身につけた多くの修行者が助法として参加するのが普通である。なお護摩とは、サンスクリット *homa* の音写で、火に投じることによって信仰対象に供物を捧げる儀式である。本山修験宗以外の宗派にも採燈護摩に似た行事があつて「柴燈護摩」と記されることがある。本山修験宗にはこのほかにも多数の秘法が伝承されており、なかでも柱源（はしらもと）護摩法は重要視されている。

研覈は「ケンカク」と読み、事実を詳しく調べることを言う。覈は、漢音では「カク」、呉音では「ギャク」と読み、「調べる」という意味である。

第二節 本山修驗宗の修行と学び方

(一) 修驗の法の学び方

訓読

一 宗規、顕密修驗の法を精究するをもって、能く宗義を守ると為す。しかしてこの三道、各々次第あり。須く善師に就きてその指南を受くるべし。今、その学則を略示す。まず修驗の法は、両峰を跋涉して、親しくその式と観行する所の法を承くること、是れその要なり。これ千古祖承、たやすく記すべからず。もし広くその深旨を知らんとせば、須らく善く顕密二教を学びてやうやく源底を領することを得。この故に、顕密の法を離れて修驗の法ありと謂ふは無稽の至りなり。

解釈

本山修驗宗の教義を正しく伝えていくためには、顕教、密教、修驗の法を詳しく研究していくことが、宗門の規則である。そして、これらの三つには、それぞれに、学ぶ順序がある。必ず良き指導者から直接に教示を受けなければならぬ。ここでは、その学び方について概略を示す。まず、修驗の法は、大峰と葛城とを自らの脚で歩き、指導者から直接に儀式と観念の持ち方についての法を伝承することが肝要である。これは宗祖である役行者以来、極めて長い間、伝承されてきたものであって、簡単に言葉に記すことはできない。もし、広くその深い意味合いを理解しようとするなら、必ず顕教と密教をよく学ぶことによって、やっと最も根本的な教えを身につけることができる。した

がつて、顯教と密教を離れて別に修驗の法があると主張することは、根拠がなく非合理的で問題外である。

注記

前節では、顯教、密教、修驗の三つの法は、鼎の三本の足が補いあって立っているのと同じ関係にある、と、それらの一体性を論述している。そして、ここでは、修驗の深い趣旨を知るには顯教と密教を学ばねばならない、として、顯教と密教を離れて修驗の法があるように主張することを強く退けている。

(二) 顯教の学び方

訓読

次に顯教を学ばんとせば、まづ四教義（四冊。天台大師撰。）、法界次第（三冊。同撰。）、菩薩戒經義記（二冊。同撰。）、小止観（一冊。同撰。）、四教儀（一冊。諦観法師述。）等を読持せよ。よろしく四教五時の義を講習し、やや戒定慧の旨を弁ふるべきなり。この三学を資として仏法威儀に住することを得。これを入道の初行となす。なほ博く法華、金光明、仁王經等を学び、明らかにその玄旨に通ず。かくの如きは顯教において復た余蘊なし。

解釈

次に、顯教を学ぼうとするなら、まず天台大師智顗の「四教義」、「法界次第」、「菩薩戒經義記」、「小止観」、また諦観の「四教儀」などを、常に手元に置いて読むべきである。頓・漸・秘密・不定の四教、藏・通・別・円の四教、

および華嚴・阿含・方等・般若・法華涅槃の五時という教義について話を聞いて学習し、次第に戒律・禪定・智慧についての意味合いを十分に理解していくのがよい。これら戒・定・慧の三字の助けによって、仏法に合った生き方をするができる。以上が、道を歩み始める最初の修行である。そこから更に、法華經、金光明經、仁王經などを学び、それらの深い意味合いを明確に理解する。ここに至れば、顕教については十分に学んだことになる。

注記

「修驗道章疏」では、右括弧内に示した部分は、二行割り書きとなっている。

智顗「四教義」は、大正新脩大藏經（以下、『大正藏』と略記する。）第四六卷に収められている。また、ここに言う「法界次第」（三冊。同撰。）とは、智顗「法界次第初門」『大正藏』第四六卷。また、菩薩戒經義記（二冊。同撰。）とは、智顗「菩薩戒義疏」『大正藏』第四〇卷No. 1811。また小止観（一冊。同撰。）とは、智顗「修習止観坐禪法要」『大正藏』第四六卷No. 1915。現代において刊行されている関口真大訳註『天台小止観』（一九七四年）では、文献考証を経て、『大正藏』に収録されているものよりも原初的と判断されるテキストから文語訳がなされている。四教儀（一冊。諦観法師述。）は、「天台四教儀」『大正藏』第四六卷No. 1931、高麗沙門の諦観による録として収められている。また、関口真大校訂『昭和校訂天台四教儀』（山喜房仏書林、一九三五年）は、同書の原文に訓点が付されており、初版の後も版を重ねている。以上、いずれも天台学の基本文献であり、「小止観」と「天台四教儀」は入門書である。

四教とは、化義の四教である頓・漸・秘密・不定と、化法の四教である藏・通・別・円を指す。化義の四教とは、教え方から見て仏法を四つに分類したものであり、化法の四教とは、教えの内容から見て仏法を四つに分類したもの

である。

五時とは、仏法の内容を五種類に分類し、釈迦の内的体験を直接的に表現したものから、総合的・体系的に表現したものへと、宗教指導者としての釈迦の活動時期になぞらえて配列し判定したものである。これら五時八教は、伝承の過程で多様化した仏教の教義的表現を整理するための枠組である。歴史学上の釈迦の生活史や、文献学上の新旧を主張するためのものではない。

(三) 密教の学び方

訓読

密教を学ばんとせばまた階梯あり。瑜伽の密軌は、いはゆる大日自証の法門なり。故に善く受授の規を得て、まさにその威徳を顕はす。然らざれば則ちただに勞して驗なきのみにあらず、反つて越法のおごりを致す。必ずこれをゆるがせにすること勿れ。切に知るべし。もし密軌の旨を学ばんとせば、則ち先づ菩提心論（一卷。龍樹菩薩造。もしその義を研ぜんとせば則ち五大尊者所述の菩提心義鈔に依るべきなり。）、大日經住心品義釈（二冊。一行阿闍梨撰。）、大日經指歸（二冊。智証大師撰。）、秘密即身義（一冊。五大尊者述。）等に依るべし。略して三密四曼の旨に通じて、以て密軌の教意を弁ず。かくの如く顕密ふたつながらに運びて入峰修行するは、即ちこの宗の極則なり。能く教導の法を得ればすなはち歩みて惑はず竟に室に入りて威徳を体す。果たしてこの域に至れば三法たがひにあひ羽翼して、適ひてその原に逢はざることなし。本宗すでに明かなればすなはち自づから中古の異説あに獅虫の義ならざらんや。

解 釈

密教を学ぼうとするなら、また順序を追った段階がある。密教瞑想法の秘密儀軌は、いわば大日如来が自ら会得した法門である。したがって、伝授を受ける規則に正しく従って初めてその偉大な功德が顕れる。そうしないなら、無駄に労力を費やして効果がないだけではなく、かえって越法の過ちを犯すことになる。このことを軽視してはならない。是非、知っておくべきである。密教の儀軌が意味していることを学ぼうとするなら、菩提心論（龍樹菩薩が造った。その内容を研究するなら五大院安然の菩提心義鈔に依るべきである。）、大日経住心品義釈、円珍の大日経指帰、五大院安然の秘密即身義などに依るべきである。身口意の三密と、大曼荼羅、三昧耶曼荼羅、法曼荼羅、羯磨曼荼羅の四曼など、密教教義の概略を知り、それによつて秘密儀軌の教えの意味を理解する。このように、顕教と密教の両方を学びながら入峰修行することが、本山修験宗の究極的な修め方である。教え導いてくれる法が手に入ったなら、歩みを進めて行けば道に迷うことなく、ついには高い境地に到達して如来の徳を体現できる。この域に至れば、顕教、密教、修験の三法は、互いに輔けあつて、本来の目標に到達する。以上のように、本山修験宗の宗義が明らかに示されているのだから、本義にたがう昔からの諸説は、ライオンに寄生している害虫のようなものである。

注 記

越法とは、越三摩耶とも呼ばれ、規則に従つて伝承の確かな法を師弟関係のなかで受け取るのではなく、自己流で、法を修しているふりをするものである。密教では、自他の向上を妨げる振る舞いとして強く戒められている。

「菩提心論」とは、「金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論」（『大正蔵』第三三卷No. 1665）をいう。龍樹菩薩の撰述と伝えられている。『大正蔵』では不空の訳となっている。

「大日経住心品義釈」とは、善無畏の口述を一行が文章化した大日経の注釈である『大日経義釈』のうち、大日経の最初の一章である住心品を対象とした部分である。日本の真言宗が依拠し用いる空海がもたらした「大日経疏」は、円仁や円珍らがそれぞれ日本にもたらした「大日経義釈」の異本と見なされている（『大日経義釈対校本表』天台宗典編纂所『統天台宗全書・密教』・大日経義釈』春秋社、一九九三年）。「大日経疏」には未再次の部分があつて口伝によらなければ十分に理解されないことがあるのに対して、「大日経義釈」には加筆と再治が施されている（神林隆浄「大毘盧遮那成仏神変加持経解題」『国訳一切経印度撰述部・密教部一』大東出版社、一九九九年）。

円珍「大日経指帰」は、『智証大師全集』（園城寺一九一八年）に「大毘盧遮那経指帰」の題目で収録されている。これは敬長による校訂本を底本としている。ここで、智顗の教相判釈において言及されていない大日経を、五時のいづれに配すべきか、という問題について、中国の天台宗が法華涅槃時より完成度の低い華嚴時や方等時などに配するのに対して、円珍は、法華涅槃時あるいはそれ以上に位置づけるべきことを論証している。これによって、日本天台宗が密教をも修めることの意義を明らかに示すとともに、法華経信仰は密教修行の形態をとることによって高い次元に達しうることを根拠づけた。

五大院と号する安然は、生年八四一年、没年不明で、平安時代初期の比叡山に住した僧侶である。多数の著作を残し、日本天台宗で学ばれる密教を理論的に基礎づけた。

(四) 真言陀羅尼についての注意

訓読

一 真言陀羅尼の音、梵と夏楚との異同は姑舎して論ぜず。本邦の呼法、寺山兩門、東密、各々に同異あり。これ祖承の然らしむるところ、悠久千歳概評を得ず。しばらくまさに本宗の善師に就きて正しきを取るべし。まさにまた一印一明また宜しく阿闍梨の面授を得て誦持すべきなり。況や十八道不動法の如きは三井流の阿闍梨に就きて伝受するを善しとす。

解釈

真言陀羅尼の音について、インドと中国との違いは、しばらく置くとして論じない。日本における読み方にも、寺門、山門、東密の間で相違がある。これは師から弟子へと伝えられてきたことによるのであって、時間をかけてもまとめて述べることはできない。今は本山修験宗の良い師について正しい読み方を覚えるのがよい。一つ一つの印契と真言を阿闍梨から対面で伝授されて誦え記憶すべきである。十八道、不動法などは、台密三井流の阿闍梨に就いて伝授を受けるのがよい。

注記

「姑舎す」とは「しばらく置いておく」という意味である。孟子の公孫丑上に「曰姑舎是」とある。寺門・山門とは三井寺と延暦寺であり、日本天台宗に伝承される密教にも法流によって作法の違いがある。東密とは空海に淵源す

る諸法流である。十八道とは、十八の印真言を基本として神仏を迎え供養する瞑想の作法であり、不動法は不動明王を本尊とした密教瞑想法である。これらについては、円珍が伝えた三井流の阿闍梨から伝授されることを勧めている。

(五) 入峰修行についての注意

訓読

春秋の入峰修行は、特にこれ、宝祚無窮、国家佳昌、將軍家の武運長久、一天太平、四海静謐を擁護祈請し、諸檀越等を福利するの公務なり。全く独善を樂ふのことに非ざるなり。これ其の世法を羽翼するは、あに遠大ならざらんや。故に法要嚴密にして精忠を竭（つく）することを要す。また旧習に膠着して以て輕易疎放なること勿れ。

解釈

一 春秋の入峰修行は、特に、宝祚無窮、国家佳昌、將軍家の武運長久、一天太平、四海静謐を護るべく祈り、諸檀越等を福利する公務である。自己の幸福を祈って行うのではない。この行事が世俗の規範を助け補うのは、実に大いなることである。したがって、嚴密に法要の儀式を執り行つて、心を込めて尽力しなければならない。以前からの習慣にこだわって固守し、そのことでいい加減に行うことになってしまつてはいけない。

注記

今日の本山修験宗では、総本山聖護院門跡の行事として、春に葛城修行、夏に大峯奥駈修行、数年に一度、国峰修

行と呼んで地方の修験道場とされた霊山の登拝を行なっている。このほか、宗門に所属する寺院と、神変講社という名で組織されている多数の信徒組織が、大峰山上が岳を始めとした山岳における抖擻修行を実践している。江戸時代、聖護院門跡による入峰は、伝統に則って威儀を調えた行列を京都市中に披露していた。現代では、聖護院の遠忌行事に際して大規模に再現されている。また、葛城修行では、地域社会の民俗行事と深く連携した儀礼が行われている。大峰奥駈では、伝承に忠実に従った峰中における秘密の修行が実践されている。

(六) 諍論と異説の禁止

訓読

宗法の受持、必ずその人を待つ。我が一派の人、すべからく先学に就き宗義を講明、以て行願を成すべきなり。妄りに自己の偏見に執し以て争ひの端を啓くことなかれ。世に、是に似て非なる者を取り、これを宗義に附会し、修験の蘊、此に存すと曰ふ者あり。不学の徒、往々にして相承し奉りて深致と為す。此れ、授者、固より論するに足らずといへども、受者、また求むるところ篤からず、因って此れを疎漫に致すなり。師資おのおの誠を竭（つく）してこれを容易にすることなかれ。

解釈

一 本山修験宗の法は、しかるべき人物によって維持・伝承されるべきものである。本山派の人々は、既に行学を修めてきた人を師と仰いで、宗門の教義と儀礼を教わり理解して、それによって行学の目標を達成していかなければ

ならない。誤って自分の偏った考えに執着して、それによって争いのきつかけを作ることがあつてはならない。世の中には、もっともらしく聞こえる誤った考えを唱えて、宗門の教義にこじつけ、これこそ修験の奥深いところだと主張する者がいる。学びの不十分な人々は、しばしば、それを聞いて信じ尊重してしまい、深いところに到達した考えだと思ってしまうことがある。宗門の教えを教授する者となれば、本来、取るに足りないことであっても、教えを受ける側は重大性を理解できず疎かにしがちである。教え導く側も、受け取る側も、最大限、誠実に振舞つて、これを軽視し許してはならない。

注記

現代でも、異説は宗門の規則で明確に禁止されている。違反者には厳しい対応があり、宗会の議決を経て処分の対象となることもある。伝統・伝承や歴史上の事実十分に裏付けられていない主張は、異説と見なされる。

第三節 結語

訓読

右、修験略要とは、我が聖護王府の庫に曾て存するところなり。而るに未だ誰が人の撰なるかを審かにせず。今、その筆格を觀るに、恐くは遍照寺道見親王の手に出づるか。今茲甲午の冬、教へに応へて之れを古記等に稽し、文義を対校しおはんぬ。因て縁起を識し、爾か云ふ。

天保五年龍集、甲午の冬、

園城寺法明律院に住する苾芻、敬長、謹みて誌す。

解釈

以上の修験略要は、聖護院がかねてより所蔵していたものである。しかし、誰が撰述したものかは明らかではない。今、その文章と筆跡の本質を見て考察すると、遍照寺道晃親王が書かれたものと推測される。本年、甲午の冬、教義に則って古い文書と比較考察し、文章の意味を比べ合せ異同を確かめた。そこで来歴を記録してこのように書き留めておく。

天保五年の歳、甲午の冬、

園城寺の法明院に住する比丘、敬長が謹んで記録する。

注記

道晃親王（一六一二生、一六七九没）、また道晃法親王は、江戸時代前期の僧侶で、聖護院に住した。遍照寺と号する。園城寺の長吏を務めた。首藤善樹編『聖護院史辞典』（聖護院史料研究所、二〇一六年）に詳しい記事がある。

敬長については解題に記した。

以上で本山修験略要の注釈を終る。

キーワード

修験道、聖護院、本山派、敬長